

River when it Sizzles (写真で楽しむ緑陰銷夏)

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 栗 博志

・遊びをせむとや生れけむ^{うま}
戯れせむとや生れけむ^{むま}
森の小鳥の声聞けば
川の流れの鳥見れば^{ゆる}
我が身さへこそ動かるれ

仏は常に在せども^{いま} 現ならぬぞあはれなる^{うつ}
家鴨は常に在せども^{あひる} 日々の営み面白し
いつか亦来て 共に遊ばむ

(梁塵秘抄 359, 26 部分・加筆)

[令和2年10月28日]

私は50年以上、鹿児島に住んでいるが、この日、初めてここを訪れた。

川は満々と水を湛え、滔滔と流れていた。兩岸には木々が茂り、桜島を遠望する雄大な

景觀に圧倒された。

まさか、この川に鳥達の営みがあるうとは、全く想像すらできなかった(図1)。

[令和2年12月16日]

この日、寒風が吹きすさんでいた。ところが、日当りのよい川下の浅瀬に、沢山の白い鳥達が、のどかに日向ぼっこをしているのに気付いた。川の様子も10月の時に比し、一変していた。鳥は鴨だろう(図2)。

その後、鴨の群れの中に、大きい白色と黒色の2羽の鳥が、いつもいるのに気づき、「白」と「黒」と名付けた。

何回か通ううちに、小学生の時の愛読書の動物記のシートンや、昆虫記のファーブルのような気持ちになってきた。



図1

満々と水を湛えた川は滔滔と流れる。

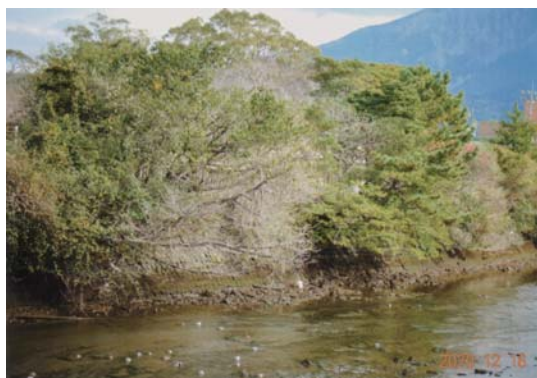


図 2

沢山の鳥達がのどかに日向ぼっこをしている。

やがて、この鳥達に愛着を覚え、現在まで月に数回、半年間、ここを訪れた。

この川は、図1で分かるように、河口の橋の向こうは、海であり、これが、川の本流である。橋の左側は分流で、本流より大分浅い。

本流は常に水が流れているが、分流は完全に干上がる事も多い。水量は季節（降雨量の多少）や、潮の干満により、変化が著しい。

本稿では、3日間を紹介する。

[令和3年4月14日]

うらかな日差しのもと、鳥達はいつものように川の中で楽しそうに遊んでいる。

当初、白と黒は白鳥と黒鳥かと思っていたが、どうやら家鴨あひると思われる。何でアヒルがここに住みついたかは、不明である。

白と黒は、いつも一緒にいるし、鴨達の内でも、特に2羽の鴨が、アヒルと仲良しだと分かった（図3）。

1羽が、灰茶色の鴨で「灰茶」と名付け、もう1羽が頭の茶色の鴨で「茶」と名付けた。この4羽はよく一緒に遊ぶし、一列に並んで泳ぐ姿もよく見かける（図4）。

[令和3年4月28日]

何度も訪れるうちに、鳩とも仲良しになった。この日は、雨で寒かった。路上を歩いて

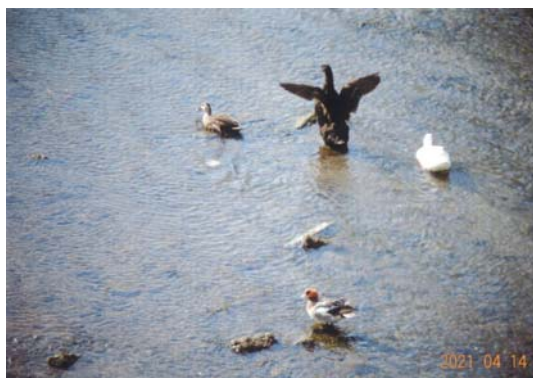


図 3

2羽のアヒル「白」と「黒」、2羽の鴨「灰茶」と「茶」が遊んでいる。

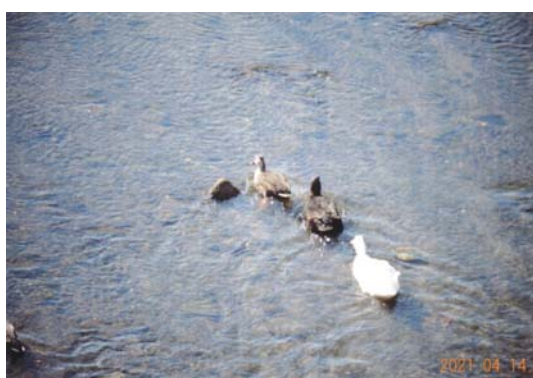


図 4

「灰茶」、「黒」、「白」が一列に泳ぐ。

いると、3羽の鳩が近寄ってきた。

いづれも羽を逆立てている。空気をためて暖を取っているのだろう。このような鳩の行動は、初めて目にした（図5）。

雨のため、水量は多かった。

今まで毎回みかけた白と黒が本流にはいなかった。増水で流されて、行方不明になったのではないかと心配になり、足速に下流の方に捜しに行った。うまく確認できればと心の中で祈った。

すると、本流と分流の分岐点で、流されて来た木の葉の中で、必死にもがいて、分流の先の方に進もうとしている茶の姿を認めた（図6）。



図 5

冷たい雨の中、3羽の鳩が羽を逆立て暖をとる。



図 7

「茶」より、分流のはるか下流で避難している「白」と「黒」。



図 6

増水した分流を「白」と「黒」を求め、懸命に泳ぐ「茶」。



図 8

この川で唯一の増水時の避難場所での「白」と「黒」。

茶も白と黒に会いに行こうとしているのだろう。私も、茶の行動から、この分流の川下に白と黒が居るだろうと確信した。

分岐部よりずっと川下の唯一残った砂岩場に、白と黒をみつけた時は、安心感で、胸が一杯になった(図7, 図8)。

この川には、アヒルが護岸の上にあがれるスロープはなく、ここが唯一の陸地である。アヒルの行動範囲は、かなり広いことが分かった。その後、時々、ここで鴨とアヒルが遊んでいるのを目にするようになった。



図 9

水量の多い、濁った川の中央の浅瀬で寄り添って立つ「白」と「黒」。

[令和3年5月12日]

この日は、水量が多く、水がかなり濁って



図10
「白」と「黒」に近づこうとする2羽の鴨。一羽は「茶」。



図13
右側から近づいて来る2羽の鳩。川に「白」と「黒」と白鷺が見える。



図11
「白」と「黒」に近づこうとする白鷺（右下）。

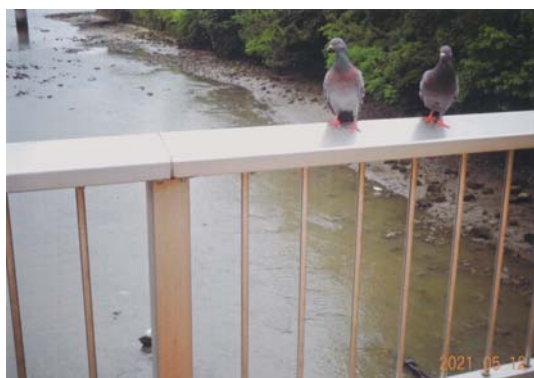


図14
2羽の鳩は、私の前で止まり、私をじっと見つめる。



図12
「白」と「黒」に近づけず、浅瀬で遊ぶ白鷺。

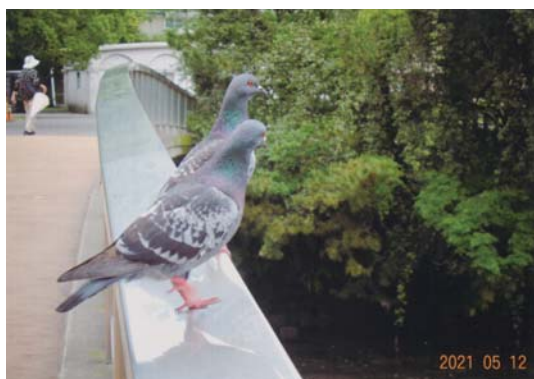


図15
2羽の鳩は、回れ右をして、私を真似て眼下の「白」と「黒」をながめる。



図16

やがて鳩は、並んで歩き去る。夢のような気分である。

いた。白と黒は、眼下の川の中央に寄り添って立っていた。なぜここに、じっと立っているのかは分からない(図9)。

2羽の鴨が、白と黒を心配したのか、あるいは一緒に遊ぼうとしたのかは分からないが、アヒル達に近づこうと試みるが、身体が小さいせいか近づけない。手前は、明らかに茶である。やがて2羽は、あきらめて上流の方に去って行った(図10)。

すると、それと入れ替るように、上流から白鷺が橋の下をくぐって、岸辺の浅瀬に舞いおりてきた。そして鴨達と同じように、白と黒に接近を試みたが、やはり無理で、あきらめて、浅瀬で遊びだした(図11, 図12)。

私が観察に熱中していると、何か右の方に気配を感じた。そして、我が目を疑った。

右を向くと、2羽の鳩が自分達も見てよ、と言わんばかりに、一列になり歩いて来た。

私の前まで来ると、私の方に向きを変えて、じっと私を見つめた(図13, 図14)。

私が声を掛けると安心したのか、次に回れ右をして、私をまねて、しばらく白と黒を見つめていたが、やがて向きを変えて、歩き去って行った(図15, 図16)。

しばらくすると、白鷺の向こうに、じっと立っていた大型の灰色の鷺と思われる鳥が飛び立ち、頭上を飛び越えて、上流の中洲に佇



図17

大型の灰色の鷺と思われる鳥が頭上を飛ぶ。勇壮である。



図18

大型の鷺と思われる鳥が中洲に佇む。この鳥は、ほとんど動かない。

んだ(図17, 図18)。

この川では、鳥達のドラマが毎日ある。不思議の国のアリスのようである。楽しい。

3時間ここにいたが、白と黒は一步も動かなかった。

ここは、まさしく緑陰銷夏の地である。

時は、ゆったりと流れている。

・鳥遊ぶ 夢が現か 緑陰の 銷夏の南風^{はえ}の
川面をそよぐ

心地良きかな

此の川の 流れも鳥も絶えずして 時は静かに流れゆく